

断熱工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 鉄筋コンクリート造の建築物における断熱材打込み工法において、工事現場に搬入した発泡プラスチック断熱材を、やむを得ず屋外に保管することにしたので、断熱材に黒色のシートを掛けて、かつ、そのシートと断熱材との間に隙間が生じないようにした。
2. 鉄筋コンクリート造の建築物における断熱材打込み工法において、型枠取り外し後にフェノールフォーム断熱材が欠落している部分については、仕上げに支障がない部分であったので、断熱材が欠落している部分のコンクリートの上から、同じ断熱材により隙間なく補修した。
3. 戸建木造住宅における断熱工事において、天井の小屋裏側に設ける無機繊維系断熱材の施工状況については、天井下地の施工が完了するまでの間に、断熱材相互に隙間がないこと、防湿層が断熱層の室内側に設けられていること等を目視により確認した。
4. 戸建木造住宅における充填断熱工法(フェルト状断熱材を用いたはめ込み工法)において、防湿層として別に施工するポリエチレンフィルムの継目については、柱等の木下地のある部分に設け、その重ね幅を30mm以上とした。

内外装工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. セッコウボード張りにおいて、突付け工法に用いるセッコウボードのエッジの種類については、ベベルエッジとした。
2. ビニル床シート張りにおいて、張付け後に湿気の影響を受けやすい箇所については、エポキシ樹脂系接着剤を使用した。
3. スウェイ方式のメタルカーテンウォール工事において、層間変位を吸収するためのスライドホール部については、手締め程度のボルト締めとし、緩止めを施した。
4. PCカーテンウォール工事において、カーテンウォール部材で層間変位に追従できるように、スパンドレルパネル方式を採用した。

内外装工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. タイルカーベットの全面接着工法における接着剤については、粘着はく離(ピールアップ)形とした。
2. 断熱材現場発泡工法における断熱材の吹付け厚さを確認する確認ピンの本数は、スラブ下面及び壁面については5mにつき1箇所以上、柱及び梁については1面につき各1箇所以上とし、確認ピンはそのまま存置した。
3. 複層仕上塗材仕上げにおいて、主材の塗付けについては、仕上げの形状が凹凸状の部分を吹付けとし、仕上げの形状がゆず肌状の部分をローラー塗りとした。
4. 外壁に使用する押出成形セメント板(ECP)のパネル相互の目地幅については、特記がなかったため、長辺及び短辺ともに10mmとした。

内外装工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. ビニル床シート張りにおける床シートの目地処理については、特記がなかったため、熱溶接工法とし、ビニル床シート張付け後、接着剤が硬化した状態を見計らって行った。
2. 縦壁ロック工法によるALCパネル工事において、外壁の縦壁と連続するパラペット部分については、その外壁のALCパネルの厚さの6倍の長さをはね出して使用した。
3. 吹付け硬質ウレタンフォームによる断熱材現場発泡工法において、吹付け厚さの許容誤差については、±10mmとした。
4. カーテンウォール工事において、プレキャストコンクリートカーテンウォール部材の取付け位置における目地の幅の寸法許容差については、特記がなかったため、±5mmとした。

内外装工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. ALCパネル下地に施すモルタル塗りにおいて、ALCパネルの表面強度が低いことを考慮して、保水剤を添加した富調査の現場調査モルタルを使用した。
2. 仕様ルートにより検証した特定天井の天井面構成部材等については、自重を天井材に負担させる照明設備等を含めて20kg/m²以下であることを確認した。
3. メタルカーテンウォール工事において、ファスナーの外方方向の位置決めについては、各階に出された基準地墨により個々に部材を取り付けると、墨の誤差などのために上下階のくい違いが生じるおそれがあるので、ピアノ線を用いて水平及び垂直方向に連続した基準を設定し、ファスナーを取り付けた。
4. 夏期に施工するコンクリート下地への塗装工事において、塗装を行う前の素地については、コンクリートの材齢が21日経過し、十分に乾燥していることを確認した。

内外装工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 化粧セッコウボード張りの軽量鉄骨天井下地の吊りボルトの間隔については900mm程度とし、天井の周辺部については端から150mm以内に配置した。
2. フローリングボード張りの釘留め工法において、湿度変化によるボードの膨張収縮を考慮して、敷居との取合い部分に隙間を設けた。
3. ロッキング構法によるALCパネル工事において、外壁のパネル間の目地のシーリングについては、三面接着とした。
4. 外壁乾式工法による張り石工事において、特記がなかったため、躯体にファスナーを固定する「あと施工アンカー」については、ステンレス(SUS304)の金属系アンカーを使用した。

内外装工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 軽量鉄骨壁下地において、スタッドに取り付ける振れ止めは、床ランナーの下端から1,400mmごととに設け、上部ランナーの上端から400mm以内については省略した。
2. 金属製の手塗の塗装工事において、2液形ポリウレタンエナメル塗り(2-U)としたので、有害物質による労働災害を防止するとともに環境への影響を考慮して、安全データシート(SDS)を作業場所に掲示した。
3. システム天井において、天井パネルにロックウール化粒吸音板を用いるので、軟化を防止するため、工事中の室内温度は80%を超えないようにした。
4. 帯電防止ビニル床シート張りにおいて、接着剤は、湿気のおそれのある下地に対して使用するため、エポキシ樹脂系接着剤とした。

内外装工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. コンクリート下地への塗装工事において、素地調整を行うことができる乾燥期間を、冬期であったので、コンクリートの材齢が14日確保されていることを確認した。
2. 下地面がコンクリートとなる「セッコウボードのセッコウ系直張り用接着材による直張り工法」において、張付け時の室温が5℃以下となる寒冷期に、やむを得ず施工しなければならないため、採暖等の養生を行い、室温が10℃以上に保たれていることを確認した。
3. 押出成形セメント板を用いる外壁工事において、横張り工法により取り付けられたフラットパネル働き(幅600mm、厚さ60mmの標準パネル)については、構造体に固定した下地鋼材に取り付け、パネル枚数3枚以下ごとに自重受け金物で受けていることを確認した。
4. 外壁のセメントモルタルによる陶磁器質タイル(セラミックタイル)後張りにおける引張接着強度検査については、引張接着強度が0.4N/mm²以上で、かつ、コンクリート下地の接着界面における破壊率が50%以下のものを合格とした。

内外装工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 化粧セッコウボード張りの軽量鉄骨天井下地の吊りボルトの間隔については900mm程度とし、天井の周辺部については端から150mm以内に配置した。
2. フローリングボード張りの釘留め工法において、湿度変化によるボードの膨張収縮を考慮して、敷居との取合い部分に隙間を設けた。
3. ロッキング構法によるALCパネル工事において、外壁のパネル間の目地のシーリングについては、三面接着とした。
4. 外壁乾式工法による張り石工事において、特記がなかったため、躯体にファスナーを固定する「あと施工アンカー」については、ステンレス(SUS304)の金属系アンカーを使用した。

内外装工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 既存建築物の特定天井に該当する既存の天井を耐震化する必要があったが、天井下地の補強が困難であったため、既存の天井が破損しても落下しないようにネット張りにしてその対策を行った。
2. 宴会場に新設する天井について、床からの高さが10mでその天井水平投影面積が600m²であったが、天井(天井面構成部材等)を単位面積質量が1.5kg/m²の膜天井とし、特定天井としなかった。
3. 仕様ルートの適用による検証を行った特定天井においては、天井面構成部材と壁及び柱との隙間を6cm以上とした。
4. 音楽堂のホワイエに新設する天井について、床からの高さが8mでその水平投影面積が400m²、天井(天井面構成部材等)の単位面積質量が10kg/m²であったが、ホワイエが避難階にあり非常口が隣接するための緩和措置を適用し、特定天井としなかった。

内外装工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. コンクリート壁下地面におけるセッコウボードのセッコウ系直張り用接着剤による直張り工法において、特記がなかったため、接着剤の塗付け間隔をボード周辺部で、150~200mmとした。
2. グリッパー工法によるタフテッドカーベットの敷込みにおいて、長い廊下については、伸長用工具としてパワーストレッチャーを使用した。
3. コンクリート下地へのセメントモルタル塗りにおいて、下地の吸水調整材の塗布回数を増やすことにより、コンクリート下地とモルタルの付着性を高めた。
4. 縦壁ロック工法によるALCパネル工事において、外壁のパネル間の目地のシーリングについては二面接着とした。

内外装工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. ビニル床シートを用いた床仕上げ工事において、下地が床コンクリート直均し仕上げであったので、ビニル床シートの張付けを、コンクリートの打込みから21日後に行うことを確認した。
2. 仕様ルートにより検証した特定天井については、天井面構成部材と壁及び柱との隙間を6cm以上設けていることを確認した。
3. 外壁乾式工法による石張り工事の施工図等において、石材の形状と寸法については、特記がなかったため、形状が正方形に近い矩形で、1枚の面積が0.8m²以下、有効厚さが30mm以上70mm以下であることを確認した。
4. カーテンウォール工事において、躯体付け金物の取付け位置の寸法許容差については、特記がなかったため、鉛直方向を±10mm、水平方向を±25mmとした。

内外装工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. カーベットのグリッパー工法において、上敷きの敷詰めは、隙間及び不陸をなくすように伸長用工具により幅500mmにつき200N程度の張力をかけて伸長し、グリッパーに固定した。
2. 木造軸組構法の壁の充填断熱工法(はめ込み工法)における防湿層の設置については、ポリエチレンフィルムの防湿層の継目を柱等の木下地部分に設け、その重ね幅を30mm以上とした。
3. プレキャストコンクリートカーテンウォールの開口部にY型構造ガasketの使用に当たり、コンクリート端部からY型ガasketをプレキャスト版にはめ込むための溝の中心までの寸法を、60mm以上とした。
4. システム天井において、天井パネルにロックウール化粒吸音板を使用したため、吸音板の軟化を防止するため、工事中の室内温度が80%を超えないようにした。

内外装工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 軽量鉄骨壁下地において、スタッドに取り付ける振れ止めは、床ランナーの下端から1,400mmごととに設け、上部ランナーの上端から400mm以内については省略した。
2. 金属製の手塗の塗装工事において、2液形ポリウレタンエナメル塗り(2-U)としたので、有害物質による労働災害を防止するとともに環境への影響を考慮して、安全データシート(SDS)を作業場所に掲示した。
3. システム天井において、天井パネルにロックウール化粒吸音板を用いるので、軟化を防止するため、工事中の室内温度は80%を超えないようにした。
4. 帯電防止ビニル床シート張りにおいて、接着剤は、湿気のおそれのある下地に対して使用するため、エポキシ樹脂系接着剤とした。

内外装工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 化粧セッコウボード張りの軽量鉄骨天井下地の吊りボルトの間隔については900mm程度とし、天井の周辺部については端から150mm以内に配置した。
2. フローリングボード張りの釘留め工法において、湿度変化によるボードの膨張収縮を考慮して、敷居との取合い部分に隙間を設けた。
3. ロッキング構法によるALCパネル工事において、外壁のパネル間の目地のシーリングについては、三面接着とした。
4. 外壁乾式工法による張り石工事において、特記がなかったため、躯体にファスナーを固定する「あと施工アンカー」については、ステンレス(SUS304)の金属系アンカーを使用した。

内外装工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 化粧セッコウボード張りの軽量鉄骨天井下地の吊りボルトの間隔については900mm程度とし、天井の周辺部については端から150mm以内に配置した。
2. フローリングボード張りの釘留め工法において、湿度変化によるボードの膨張収縮を考慮して、敷居との取合い部分に隙間を設けた。
3. ロッキング構法によるALCパネル工事において、外壁のパネル間の目地のシーリングについては、三面接着とした。
4. 外壁乾式工法による張り石工事において、特記がなかったため、躯体にファスナーを固定する「あと施工アンカー」については、ステンレス(SUS304)の金属系アンカーを使用した。